

# 韓・日の5世紀から6世紀にかけての文字の内部化

権 静\*

---

## 目 次

---

第一章 はじめに
第二章 日本の5世紀の文字資料の特徴
第三章 高句麗の廣開土王王陵碑
第四章 新羅眞興王の巡狩碑
第五章 おわりに

---

## 第一章 はじめに

古代、文字を持たなかった日本と韓国における文字の使用は、國家内部での文字への要求の高まりの結果ではなく、当時中國を中心とした東アジア世界に冊封關係という政治關係を通じて参加するための手段としてはじまった。中國の被冊封國は朝貢と上表文の製作が義務づけられ、漢字は外交上の特殊技術であり、その始めから日本や韓國內部で意味を持ち機能していたわけではない。それは國家の外でだけ意味を持った「外部の文字」であった。日本で発見されている「漢委奴國王」印はそのような文字狀況を端的に見せてくれるもので、この印は倭國の使者が57年に後漢光武帝から冊封された証しとして授けられたもので、以後の上表文製作時に封印として用いられるべきものであった。このように中國と海を隔てていた日本が、後漢に使者を送ることによって國家として始めて中國の文字に触れることになるのと違い、中國と陸続きになっている朝鮮の場合は、國家として政治的に中國の文字を必要とする以前に、中國による漢四郡の設置によって、文字が直接、國內に持ち込まれることになる。そのため韓国では、樂浪時代の文字から古代朝鮮の文字が始まったとし、それが高句麗・新羅・百濟の三國に継承されたと見ている。1)このような見解は、文字の問題を、自分たちの言葉を表記するために漢字を必要としたとする、内的な必要性から論じたもので、漢字が東アジア世界に参加するための政治的な手段であったことは考慮していない。それは、当時の朝鮮の文字狀況を示してくれる文獻資料が伝わっていないことにも起因する。

しかし、樂浪時代の文字狀況をあらわす金石文資料は存在しており、そこから当時の文字の特徴を考察することができる。例えば「黏蟬縣神祀碑」は、朝鮮の社會内部へ文字が浸透した結果、建立されたものではなく、漢代にその類例を多く見だせるように、漢の文字が樂浪に持ち込まれたことを示しているにすぎないのである。結論だけを簡略にいうと、樂浪時代の文字は漢の文字をそのまま半島内

---

\* 東京大學 比較文學比較文化 博士課程修了 日本學 中部大學講師

1) 金亨奎『増補國語史研究』(一潮閣、1983年)、p.367。除炳國『大學國語學史』(學文社、1982年)、pp.46-47。李基文『國語史概論』(塔出版社、1984年)、pp.43-44。金思燁『古代朝鮮語と日本語』(六興出版社、1988年)、p.49。

に持ち込んだだけにすぎず、それは朝鮮の社会内部とは隔たった所に存在し、それが朝鮮の社会内部に浸透することはなかった。

古代朝鮮における文字の始まりやはり、中国との政治的関係を前提とする吉林省集安出土の「晋高句麗率善邑長」・「晋高句麗率善任長」・「晋高句麗伯長」などの銅印から推定されるように中国との政治関係に起因するものと思われる。これら銅印は、『三國志』『魏書韓伝』に「その官名には魏から率善邑君・歸義侯・中郎將・都尉・伯長などを与えられている者がいる」<sup>2)</sup>とあるように、漢・魏・晋時代に周辺諸國の首長に与えられたもので、高句麗の首長が晋から授かったものである。日本にも、卑弥呼の使者が243年に魏の皇帝から授かった「率善中郎將」印がある。未だ韓国において金印は発見されていないが、上の銅印が示唆するように高句麗も中国との政治関係において印を授かっており、日本の「漢委奴國王」との金印の例から、高句麗が後漢光武帝に遣使朝貢し國王に冊封された際（32年）に、日本と同様その証しとして金印を授かったものと思われる。当時、同じ漢字文化圏に属していた日本と韓国における文字の始まりは、中国が秩序付けた東アジア世界へ参加するための政治的な要請によるものであった。このような「外部の文字」が古代日本と韓国の国家内部で意味を持ち機能し始めるのはいつからなのかを、「日本の刀劍銘」・「高句麗の廣開土王陵碑」・「新羅の眞興王巡狩碑」の三段階にそって、日本と韓国の比較検討を通じて論じていきたい。

## 第二章 日本の5世紀の文字資料の特徴

日本で発見された5世紀以前の文字には、土器・鏡などに刻まれたものがあるが、これらは中国から舶載された文字であるか、または中国のそれをまねたものに過ぎず、日本の社会内部で機能した文字とは言えない。他に、中国との政治関係で用いられた「漢委奴國王」との金印があるが、これも当時の中国が秩序付けた東アジア世界に参入するための手段としての文字であり、日本の社会内部の文字状況を示すものではない。このように、5世紀以前の日本の文字は、中国との政治的関係におけるみ機能するものであった。

その文字が日本内で意味を持ち、社会を組織するものとなるのは、以下の刀劍銘・鏡銘が示すように5世紀以後になってからである。これら文字は、對外関係において意味を持つ以前の文字とは違い、日本の社会内部で機能するものとなっている。以下、その銘文の検討を通じて5世紀以後の文字が持つ意味を見ていきたい。

はじめに、「隅田八幡宮人物畫像鏡」について見ていく。この鏡の製作年代は443年か503年に比定されており、その銘文は次のようである。

癸未年（503）八月十日に大王の御代男弟王（繼體天皇）が意柴沙加宮におわした時、その臣の斯麻が長壽を願って、開中費直の漢人、今州利の二人を遣わして、良質の白銅二百早をもってこの鏡を作らしめた。<sup>3)</sup>

この鏡銘は「矣」「大」「意」「遣」「作」の字が左文であるように、文字として明確でないところがあり、

2) 井上秀雄『東アジア民族史』（平凡社、1974年）、p.197。

3) 福山敏男「隅田八幡神社藏鏡の銘文」『中國建築と金石文の研究』福山敏男著作（中央公論美術出版、1983年）。

そのためその読みにも揺れがある。しかし、この銘文は5世紀以前の外交の文字とちがって、「大王」との文字が日本の王<sup>4)</sup>を指すように、日本の社会内部で意味を持つものとなっている。そのような文字の特徴は、以下の三つの刀剣銘にもよく表われている。その銘文を、千葉縣市原市稻荷台一号墳出土「王賜」銘鐵劍、埼玉縣行田市稻荷山古墳出土鐵劍（以後、稻荷山鐵劍）、熊本縣玉名郡江田船山古墳出土鐵刀（以後、江田船山鐵刀）の順に検討していく。

「王賜」銘鐵劍銘

王、□□<sup>5)</sup>に賜う。敬んで安ぜよ。<sup>6)</sup>この廷刀<sup>7)</sup>□□□（吉祥句か）。<sup>8)</sup>

この鐵劍銘は上記のように、個人名などが記されておらず、簡潔な文句でなっている。また、その性格は「王賜」との文字が示すように下賜刀と思われるが、下賜の対象や年号・干支が省略されており、それについて、平川氏は次のように説かれている。

年号・干支を欠くことは本鐵劍がある出来事を記念したり、特別に個人の顯彰を目的とするものではないことを示唆しているのではないだろうか。また、下賜対象者を特定していないことは、同文の銘文入り鐵劍を複数下賜するためであったと推定される。つまり、本銘文が冒頭に他の刀剣銘に通有の年号・干支を記載していない点にむしろ大きな特徴があり、またこのことが本銘文の性格を決定づける重要な要素となる。<sup>9)</sup>

このように平川氏は「王賜」銘鐵劍が、個人名を記す他の刀剣と異なって、王の權威を示すものとして複数つくられ下賜された可能性について述べられている。

「稻荷山鐵劍銘」

辛亥の年七月中、記す。オワケの臣。上祖、名はオホヒコ。其の兒、(名は)タカリのスクネ。其の兒、名はテヨカリワケ。其の兒、名はタカヒシワケ。其の兒、名はタサキワケ。其の兒、名はハテヒ。其の兒、名はカサヒヨ。其の兒、名はヲワケの臣。世々、杖刀人の首と爲り、奉事し來し今に至る。ワカタケルの大王の寺、シキの宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百鍊の利刀を作らしめ、吾が奉事の根源

- 4) 仁賢天皇または武烈天皇とする説（福山前掲書）、允恭天皇とする説（水野前掲書）、応神天皇とする説（駒井和愛「隅田八幡藏畫像鏡考」『東方學』4輯、1970年）、武烈天皇とする説（川口勝康「隅田八幡人物畫像鏡銘」『書の日本史』第一卷（平凡社、1975年））などがある。
- 5) 平川南「銘文の解讀と意義」『「王賜」銘鐵劍概報』（吉川弘文館、1988年）p.21。『後漢書』89 南匈奴列伝の「永元四年(92)の遣耿即授璽賜玉劍四具」で、「賜」の次に刀剣名をおいていることと、本銘文の構成がこれと類似していることから、□□は劍の名称であると推定されている。
- 6) 東野治之『シンポジウム鐵劍の謎と古代日本』（新潮社、1979年）。「安」は「按」に通じるとし、「按劍」の意に解されるとしている。「按劍」は劍をなでる、かたなのつかに手をかけるとの意味で、敬安は「敬んで安ぜよ」と讀める。
- 7) 福山敏男「江田船山古墳出土大刀の銘文」『中國建築と金石文の研究』福山敏男著作（中央公論美術出版、1983年）p.339。江田船山刀劍銘に「四尺廷刀」とあることから、この銘文も「廷刀」と讀める。福山氏は、「廷刀」の「廷」は官廳または直の義で、次の字と合わせて「廷刀」は「官刀」・「直刀」となるとし、宋『王復齋集鐘鼎款識』掲載の漢元嘉刀銘に「元嘉三年五月丙午日造此□官刀長四尺二□□□宜侯王大吉祥」とあるのが参考になると述べている。
- 8) 注5前掲書参照。廷□の次は、中平刀（辟不祥）・七支刀（辟百兵）・江田船山刀劍（長壽子孫綿々得王恩）などがそうであるように、吉祥句が刻まれていたと思われる。
- 9) 注5前掲書、p.22。

を記す也。10)

#### 「江田船山鐵刀銘」

天の下治らしめし獲□□□鹵大王の世、典曹に奉事せし人、名は無利弓、八月中、大釜を用い、四尺の廷刀を并(作)わす。八十たび練り、□十□。三寸上好の利刀なり。此の刀を服する者は、長壽にして子孫綿々、王恩を得る也。其の統ぶる所を失わず。刀を作るもの、名は伊太加、書する者は張安也。11)

この2つの刀劍は、「王賜」銘鐵劍が個人名を記していないのに對して、大王名と臣名を明記しており、「稻荷山鐵劍」は表に57文字、裏に58文字を、「江田船山鐵刀」は棟に74文字を記している。その製作された年は、稻荷山鐵劍の「辛亥年」との干支と、「獲加多支鹵大王」（江田船山鐵刀にも獲□□□鹵大王世とある）が雄略天皇を指すと思われることから、471年に比定されている。これらの刀劍銘は、「王賜」・「吾左治天下」・「治天下獲□□□鹵大王世」とのように、日本大王の權威のもとに社會を秩序付けているが、このような、刀劍をもって王の權威を誇示するといった方法はどこから由來するのか。

それは『魏志』倭人伝の、卑弥呼の使者に渡されたとする「五尺刀二口」から推定することができる。『魏志』によると、景初二年（238）に朝貢してきた卑弥呼の使者に對して、明帝は詔書と數々の物を与えており、その中に「五尺刀二口」が含まれている。

この「五尺刀」は魏の皇帝の權威を示すものとして、倭の卑弥呼に下賜されたものである。またそれは、倭が中國を中心とした世界秩序に組み込まれたことをも意味する。日本はこのような中國との關係から、刀劍の下賜を通じて、王の權威のもとに社會を組織するという方法を學び、それを國內に轉用したのである。そこで、日本の「大王」を中心とする「天下」が誕生することになる。この「五尺刀二口」は現在残されていないが、中國から日本への下賜刀と思われる「中平刀」と「七支刀」が伝わっている。次に、その銘文の検討を通じて、兩者のもつ意味を明らかにしていきたい。

#### ①中國からの下賜刀

はじめに、中平刀の銘文からみていく。

中平□年の五月丙午に文刀をつくる。百鍊清剛上応星宿（吉祥句）

最初の文字である「中平」は、後漢靈帝の年号で184から189年に渡って使用されたものであるが、そのような年号を、刀の冒頭に記すことの意味は何なのか。「中平」は單に年号であるだけでなく、その主体である後漢靈帝の權威をも示すもので、中國皇帝はその中平刀を日本に下賜することによって、中國を中心とした世界秩序に日本を組み込ませている。次に、「七支刀」の銘文について検討していく。

（表）東晋泰和四年（369）十六日丙午正陽、百鍊□の七支刀を造る。百兵をしりぞく。倭王を侯王とすべく、□□□□作る。

（裏）先世以來未だ有らざりし此の刀は、百濟王世子の奇生（貴須）が東晋皇帝の聖音によって倭王

10) 狩野久「銘文の釋讀と解説」『稻荷山古墳出土鐵劍金象嵌銘概報』（埼玉縣教育委員會編、1979年）。

11) 「銘文の釋讀」『江田船山古墳出土國寶銀象嵌銘太刀』（東京國立美術館編、1993年）。

旨の爲に造る。後世に伝示せよ。

この「七支刀」の銘文をめぐるは様々な論議がなされており、中でも「七支刀」の性質に関して、それが百濟から倭に献上されたとする榎本杜人・福山敏男の説<sup>12)</sup>、百濟から倭に下賜されたとする金錫享の説、百濟と倭の對等な關係において授受されたとする宮崎市定と佐伯有清の説<sup>13)</sup>、東晋が百濟を介して倭に下賜したとする栗原朋信と川口勝康の説<sup>14)</sup>などがある。このように様々な説があるが、刀劍は『魏志』倭人伝に見える「五尺刀二口」のように与える側の權威を示すものであり、献上説や對等説は成立し難いと思われる。結局、「泰和」が東晋の年号であることから、「七支刀」は東晋皇帝の權威を示すべく百濟を介して倭に下賜されたとする、栗原・川口両者の説が説得力を持つ。

以上見てきたように、「七支刀」と「中平刀」は中國が日本に与えた下賜刀であり、それを通じて中國皇帝は自らを中心とした世界秩序に日本を取り込んでいる。日本はそこから、王の權威のもとに世界を組織することを學び、その方法を日本の國內に轉化させていった。それが、日本の三つの刀劍銘なのである。つまり日本の刀劍銘は、「王賜」・「吾左治天下」・「治天下獲□□□鹵大王世」とのように、日本大王の權威のもとに社會を秩序付けており、それは中國のそれを方法として模倣した結果である。このように、中國との政治關係の中でのみ用いられた對外的な文字が、5世紀の段階においては、日本の社會内部を組織する文字として、國內で意味を持つものとなっている。それでは韓國の場合はどうなのか日本との比較検討を通じて見ていきたい。

### 第三章 高句麗の廣開土王王陵碑

高句麗において「外部の文字」（中國との對外關係においてだけ意味を持つ）がその性質に変化を見せるのは、現在残されている文字資料に沿っていうと、高句麗の最古の碑文とされる「廣開土王陵碑」からである。この碑文に関する研究は「辛卯年條」に関するものが多く、碑文と『三國史記』を照らし合わせ、当時の事實を究明しようとしている。そのため碑文の一部にしか研究の焦点が置かれず、碑文全体のもつ意味はあまりと問われてこなかった。一讀して、碑文の鄒牟王神話からわかるように、この碑は当時の事實を述べるために立てられたわけではない。この碑文は世界の中心國としての高句麗のあるべき姿を、そしてその國に相應しい國王としての資質を顯彰することを目的としている。ただ、碑文が漢字によって成されているように、その方式は中國の世界像を轉用したものであった。そのため「廣開土王陵碑」の性質を検討するにおいて、中國の例との比較検討は欠かせないものである。そこで、以下「廣開土王陵碑」がもつ意味を検討していきたい。

#### ① 鄒牟王神話の持つ意味

高句麗の始祖鄒牟王は天帝を父とし河の神の娘を母とする神聖な存在であった。廣開土王陵碑で「世子儒留王は命を顧み、道によって治め、大朱留王がそれを受け継いだ。十七世孫の國岡上廣開土境平安好太王が18歳で登祚した」と、子孫が始祖鄒牟王の血筋であることを述べているのも、その神

12) 榎本杜人「七支刀銘文再考」『論日本文化の起源』2（平凡社、1971年）、福山前掲書。

13) 宮崎前掲書、佐伯有清『七支刀と廣開土王碑』（吉川弘文館、1977年）。

14) 栗原前掲書・川口前掲書。

聖さが受け継がれていることを表わすためと思われる。

特に廣開土王は高句麗を世界の中心國に成長させた王に位置づけられており、その偉大な王としての正当性を確保するためにも、天帝との繋がりが要された。このように始祖神話を用いて、子孫王の偉大さを強調し正当化するのには高句麗に限られたことではない。それは日本と中國においても同じであった。中國の例との比較検討を試みる。「成陽令唐扶頌」（後漢唐君碑）は光和六年（183）に建立された、成陽の令（長官）扶穎川を讃えた碑文である。成陽は中國古代の聖帝の一人である堯が死んで埋藏された地であると同時に、その母慶都の陵がある場所でもある。そのため、この碑文の主人は帝堯の子孫に位置づけられ、「後漢堯母碑」の神話部分の引用を通じて神聖化されている。次にあげるのがその碑文である。

君のいみなは扶であぎなは正南、穎川の人で、其の先は慶都から始まる。慶都は赤龍を感じ、堯王を生んだ。唐をなし、天下をよく治め、天を尊み民を重んじる。虞□に位を譲った。光受し領土を受ける。天地人の三統に通じる。苗胄（子孫）は枝のように分れ…おもうに堯の徳は廣くを被う。その恩に従うべく、陵毫廟を造立し堂を授ける。四遠の童冠は衣をかかげ業を受ける。…赫赫たる唐君である帝堯の苗氏族の各任所安は同じでなくとも、本同末異である。君体は光り輝き、芳馨があり山の如くうるわしく、□の如くたかく不傾であり、海の如くおだやかで、□のごとくみちることがない。<sup>15)</sup>

この碑文は、初めに碑主が堯の子孫であることを述べ、その堯が如何に偉大な帝王であったのかを述べている。そして偉大な帝王によくあるような、堯の誕生神話を紹介している。堯はその母である慶都が「感赤龍」した結果、生まれた神聖な帝王であり、その治績は「堯徳光被之恩…四遠童冠 衣受業」と、四方の遠くに隔たった土地にまで及んでいた。堯はまたその四遠から恩澤を浴び教えを受けるために拜趨してくるような偉大な帝王であった。碑主は「苗胄枝分」・「赫赫唐君帝業之苗」・「本同末異」と、自らがその偉大な帝王の子孫であることを明かし、堯と同じようにその恩澤によって國內に平穩をもたらせ夷狄を降伏させていること述べている。碑主は自分がその血筋を継承している堯の子孫であることを強調することによって、神聖な存在となっている。このような自己保証は、個人に止まらず「帝堯碑」<sup>16)</sup>の「惟昔帝堯聖徳慶□□□赫赫蕩蕩□其赤精之胄爲漢」（これ昔帝堯の聖徳は慶□□□明らかで廣大である。その赤精（帝堯）の子孫が漢をなす）と、國にまで至っていた。廣開土王陵碑文で廣開土王が自らを天帝の子孫とするのと共通する。以上、堯が天帝の子として神聖な生まれであること、四海に君臨した帝王であること、その堯の子孫であることを強調することによって成陽の長官扶穎川が自分を權威づけたことなどを考察してきた。このような碑文の内容は、廣開土王が天帝の子である鄒牟王の子孫として、その恩澤を四海に廣め、國內を安定させたとする廣開土王陵碑と相通する。高句麗を世界の中心に位置づけようとした廣開土王陵碑が、國王をそれに相応しい神聖なる存在に位置づけようとしたのは当然のことであるが、高句麗の小中華思想と同様、中國の方法を参考としている。しかし、この碑文は中國ではなく高句麗を中心とした天下を描いており、それは高句麗國內で意味を持つものとなっている。その面において、この碑文はそれ以前の文字とは異なる。

## ② 高句麗中心の天下

碑文は鄒牟王神話とその子孫である廣開土王の王としての資質を述べた後に、高句麗がどのように

15) 「金石古文」卷十『石刻資料新編』第一輯 第十二卷（法仁文化社、1987年）。

16) 「隸釋」卷一『石刻史料新編』第一輯 第九卷（法仁文化社、1987年）。

周辺の國を治め世界を秩序づけていったのかについて述べている。碑文において、稗麗・肅慎・百濟・新羅・東夫餘は高句麗の屬國に位置づけられ、朝貢が義務付けられている。朝貢は屬國であることの証であるため、その義務を遂行しなかった場合には、「躬率往討」とあるように高句麗の「太王」によって討伐されることになる。また倭のように朝貢が義務づけられていない、つまり高句麗の天下に含まれていない國であっても、その天下内の秩序を亂すのは許されないことであり、そのような行爲は征討の理由となる。また百濟・新羅の例が示唆するように、屬國に問題が生じた場合には、高句麗がその問題を解決することによって、天下の秩序を守っている。このような高句麗中心の天下観はどのようにして誕生したのか。そこで想起されるのが中國の中華思想である。西嶋定生氏はそれについて次のように述べている。

中國王朝は世界の中心であり、これを支配する皇帝は世界秩序を規律する有徳無比の君主であるから、周辺諸民族はその徳を慕い、その徳を享受しようとして朝貢してくる…中國王朝は天下の中心であり、その皇帝の徳は天下のすべてに行きわたるべきものである。17)

このように中國は自らを天下の中心に位置づけ、周辺國はその中國に朝貢し冊封されることによってその天下の一員になろうとした。ここでも朝貢は天下の秩序を成り立たせるための重要な要素であったと思われ、朝貢を含めた屬國としての義務を遂行しなかった場合には、中國によって討伐されている。そのような例は高句麗においても見られる。王莽は匈奴を討伐するために、高句麗に出兵を命じたが、高句麗はこれを拒否している。もともと中國の皇帝は冊封國に出兵を命じることができ、これは漢代皇帝の玉璽制度からも確かめられることである。18)その命に従わなかったということは、中國中心の世界秩序に叛いたことを意味し、中國はそれを守るためにも高句麗を征伐する必要があると思われる。また魏の世宗が貢納を滯らせたことを指摘しているように、長壽王代の440年から461年にかけて朝貢の記事が見えない。中國にとって、高句麗がこのように冊封國としての義務を怠ることは容認し難いことであったと思われる。高句麗の廣開土王陵碑はこのような中國中心の天下思想を高句麗に適用させたものである。高句麗の屬國に位置づけられている稗麗・肅慎・百濟・新羅・東夫餘との関係で朝貢が重視されているのも、百濟・新羅・東夫餘がその義務を怠って討伐されているのも、そのためである。また圏外の倭を登場させることによって、一層高句麗の天下の秩序を強化させている。19)

今まで「廣開土王陵碑」を、中國の例との比較を通じて検討してきた。廣開土王陵碑は高句麗を世界の中心に据え、それに相応しい國王像を創るために、始祖神話や聖王の資質を表わす常套句（武威振被四海・國富民殷 五穀豊熟）を用いている。また高句麗を中心とする天下に相応しく、周辺國は高句麗の屬國として朝貢を行ない、その秩序を亂すものは征伐されている。このように碑文は、それ以前の「晋高句麗率善邑長」・「晋高句麗率善佰長」・「晋高句麗率善仟長」などの文字と違い、高句麗の中で意味を持つ内部の文字となっている。しかし、始祖神話や聖王の資質を表わす常套句を用いて王を神聖化したり、周辺國を朝貢してくる屬國に位置づけ自國を天下の中心國とする手法は、中國のそれ

17) 西嶋定生『日本歴史の國際環境』（東京大學出版社、1994年）、p.72。

18) 西嶋定生「皇帝支配の成立」『中國古代國家と東アジア世界』（東京大學出版、1983年）。

19) 李成市「表象としての廣開土王碑文」『思想』842（岩波書店、1994年）、p.46。ここで李氏は、廣開土王碑文の倭は高句麗の秩序世界をおびやかす難敵ではあるが、それは廣開土王の偉大さを引き立たせるトリックスターとみなすことも可能であると論じられている。

を借用したものであり、それはかつて高句麗が中國との關係から學んだものであった。だからこそ、碑文に中國は存在しない。現實的な對外關係において高句麗は中國に朝貢しており、そのような中國は高句麗中心の天下において無用な存在だったのである。

## 第4章 新羅眞興王の巡狩碑

眞興王の時代(540-576)、新羅は昌寧碑・北漢山碑・黃草嶺碑・磨雲嶺碑の四つの巡狩碑を建立している。昌寧碑は561年に慶南昌寧に、北漢山碑は568年以後に京畿道高陽郡に、黃草嶺碑と磨雲嶺碑は568年に各自、咸南咸興郡と咸南利原郡に建碑されたものである。これらの巡狩碑には「朕」「帝王建号」以外にも、中國の天下思想を想起させる「修己以安百姓」「蒙天恩」「四方託境」「隣國誓信和」などの文字が見える。

眞興王が國の領土を整備した後、地方を巡狩しこのような碑を建てたのは、眞興王の權威を地方に示すためであったと思われる、それは中國の世界觀を新羅國內に轉化させることによって果たされている。次に中國における巡狩とはどのようなものだったのか、中國の例との比較を通じて新羅の眞興王巡狩碑の性格を明らかにしていきたい。

### ① 中國の巡狩碑との比較検討

中國には、秦始皇帝の巡狩碑が七つある。始皇帝が二十六年(前221)に天下を統一した後、自らを「朕」と称し、國土を巡狩した際に立てられたもので、始皇帝二十八年建立の「鄒嶧山碑」「泰山碑」「琅邪台碑」、二十九年建立の「之罘山碑」「之罘山東觀碑」、三十二年建立の「碣石山碑」、三十七年建立の「會稽山碑」がそれである。ここでは、始皇帝の巡狩碑を代表する「鄒山碑」と「泰山碑」を検討する。

#### 「鄒嶧山碑」

皇帝太初の古に立國し世を嗣いで王と称する。亂逆を討伐し四極を威光で動かす。戰に關する事柄が正直、方正で兵士が奉詔する。暴強をなくし永久に滅することなし。二十六年立派な名をたてまつり、孝行の道を顯明にする。既にやすらぎをむかえ惠を降す。親しく遠方に行き+山に登る。羣臣、從者みな のびやかに昔の亂世を思う。分土し開争し日々流血し戰って功をたて以て邦を建てる。太古始世から無数のけわしいことがあり五帝はこれに至ることを禁止できなかった。今の皇帝一家は天下の兵を起こさせることなく災害を滅除させ、民は康定し利益と德澤は長久である。群臣は此の樂を石に刻し治國の大法を記すことを唱えた。<sup>20)</sup>

#### 「泰山碑」

皇帝が天位を踐むにあたって、制度を作り、法典を明らかにし、臣下はこれを修め整えた。それから二十六年して、初めて天下を併合して、諸侯はみな服従しないものはなくなった。ここに親しく遠方の人民の間を巡幸し、今この泰山に登り、あまねく東方のはてまで親覽し給う。從臣たちは謹んでその功績の跡を思い、大業の根源をたづね、恭しくその功德とたたえまつる。治世の道は天地と運行をともにし、もろもろの物産は宜しきを得て過不足なく、みな法式通りである。<sup>21)</sup>

20) 「金石萃編」『石刻資料新編』第一輯 第一卷。

21) 「秦始皇帝本紀第六」『史記』新釋漢文大系(明治書院、1973年)、p.329。



天下を統一した始皇帝は、その翌年から地方を巡行しはじめ、第一回（前220）は西北地方、第二回（前219）は東方及び南方地方、第三回（前218）は東方地方、第四回（前215）は東北地方、第五回は（前210）は南方地方を巡遊している。その最遠地は西が隴西、北が碣石、東が之罘、南が會稽に至る。22)この巡幸の際に、始皇帝は碑文を立てており、上述した「鄒山碑」と「泰山碑」からわかるように、それは始皇帝が六國を平定し天下を統一した偉大なる皇帝であること、その聖徳が世界の四方に及んでいること、それを確認するために遠方の地を巡幸していることなどを主な内容としている。

。 稻葉一郎氏は巡狩の目的について次のように語っている。

旧六國の都をはじめとする重要な都市を訪問・視察したのは、旧諸侯に代わる天下の支配者の威厳を誇示すること、いわゆるデモンストレーションであり、政治宣伝であったといつてよい。巡狩の途次に立てられた刻石は始皇の人民に對するそのような宣伝の一つの表現形式と見ることができる。23)

巡幸というのは、このように皇帝の威厳を國民に示すものであり、それは特に新しく編入された地において大きな意味をもっていた。巡狩碑が始皇帝を、六國の亂世を終わらせ泰平の天下をもたらした聖なる皇帝に位置づけているのもそのためである。巡狩碑はこのように王都から離れた辺境の地において、王の權威を象徴するものであった。もう一つ、これらの碑文に共通している点は、みな山に立てられていることである。始皇帝が巡幸した山は、泰山は無論のこと、その多くが古くから近隣の國々によって神聖視された山である。『史記』封禪書に次のようにある。

天子は天下の名山大川を祭り、諸侯はその領域内の名山大川を祭る。天子は嵩山などの五嶽を三公（太師・太傅・太保）になぞらえ、四瀆を祭るには諸侯になぞらえる。（中略）その昔、夏・殷・周三代の都はみな黄河と洛水のあたりに置かれた。ゆえに嵩高すなわち嵩山を中嶽とし、他の四嶽はそれぞれの方面のままにあり、四つの大河はみな山東にあった。秦が皇帝と称するようになると咸陽を都としたので、五嶽四瀆はみな東方にあることになった。五帝から秦まで、かわるがわる帝王が興ったり衰えたため、名山大川はあるいは諸侯の領地にあたり、あるいは天子の域内にあたりしたので、その祭礼も簡略にしたり、鄭重にしたりする仕方も時代ごとに異なっていちいち書くわけにはいかない。しかし秦が天下を併合してからは、祭官が常づね奉じている天地・名山・大川・鬼神をば次第に順序立てることができるようにさせた。24)

以上から天子は天下の名山を祭っていたこと、始皇帝においてその祭祀の秩序が定まったことなどがわかる。古來、神がいるとされる名山は神靈な存在として、祭祀の對象となっていたのである。始皇帝が巡行し碑文を立てた山々も、皆神が住む山として崇められていた。泰山は五嶽の中の東嶽であり、之罘山と琅邪山は齊國によって「八神」と總称される神々の5、8番目の神が祭られていた祭場であり、會稽山は禹が葬られたとされる神聖な山であった。始皇帝がこのような名山を巡り祭祀をささげ、碑を立てたことの意味を韋山氏は次のように述べている。

22) 西嶋定生『中國の歴史』2秦漢帝國（講談社、1974年）、p.38。

23) 稻葉一郎「秦始皇の巡狩刻石」『書論』25（1989年）、p.81。

24) 注21前掲書、p.222、p.238。

始皇帝の巡遊ルートには各地の名山が点綴している。…始皇帝はこうした名山をめぐる、みずから祭祀を主宰した。それはすなわち、これまで東方六國が個々に保有していた祭祀権を彼が掌中に収めたことを意味する。それと同時に、名山を祭ることによってそれぞれの土地の支配権を獲得するという呪術的な効果も、おそらく期待されていたものと思われる。<sup>25)</sup>

このように始皇帝は、碑文を通じて旧六國の住民に、天下を統一し世に泰平をもたらした聖なる皇帝像を刻印させると同時に、彼らが名山として祭祀してきた山々を巡遊しその祭祀権を統一させることによって、精神的な面における國家統一をも目指したのである。同じことが眞興王巡狩碑においても言えるのではないか。

北漢山碑が立てられた北漢山は、はやくから漢水流域にある標幟的な山岳として、大と天の義を合わせ持った神聖な山として崇拝され、<sup>26)</sup>またこの地域は551年新羅と百濟が、高句麗から篡奪し、その二年後には新羅が独占したというように、三國の攻めぎ合いが續いたところである。磨雲嶺は『東國輿地勝覽』<sup>27)</sup>によると、「故防胡處」と胡をふせぐ役割をなし、そこには「磨雲嶺烽燧」とのろしもあったとされる。黄草嶺は『東國地理志』「則東沃沮亦有時爲新羅所奪有矣」から、新羅が沃沮から篡奪した嶺であることが分かる。

このように、これらの山は他國との境界をなし、國を保護する役割をなしていたため、神聖な山として地域の住民に崇められていたと思われる。そもそも新羅において、中國のような山岳崇拝が行われていたのか。『後漢書』と『三國志』の「穢伝」には「其俗重山川」とあり、『旧唐書』「新羅伝」には「好祭山神」とあることから、朝鮮における山岳崇拝の起源が古いことは確かなようである。新羅眞興王が北漢山、磨雲嶺、黄草嶺を巡幸し碑文を建てたのも、始皇帝と同様に、新しく新羅の領土に編入された地域の住民に眞興王の權威を披露すると同時に、かれらが崇拝していた山の巡幸を通じて聖なる王というイメージを刻印させるためだったと思われる。碑文中の「採民心以欲勞」も、巡幸地の住民を意識したものである。このように國王の巡幸は、新しく編入された領土において欠かせないものであった。昌寧碑も加耶を意識して國境に立てられたもので、その面で他の碑と相通する。

また、始皇帝の碑がみな國の辺境に立てられているように、眞興王の巡狩碑もみな國土の辺境にある。そして、碑文には「蒙天恩」・「四方託境」とあり、新羅が自らを世界の中心に据えていることがわかる。これは始皇帝碑の「皇帝之明 臨察四方」・「振動四極」と共通する。このように新羅巡狩碑の性質は、中國が成した漢字文化圏に屬する一國としての新羅の位置を考慮した時、明瞭になってくる。新羅の文字やはりそのような立場で考察すべきであって、新羅の文字を高句麗との影響関係の中でだけ論じるのは、文字の始まりがどこから由來するのかという問題を考慮していないためである。

以上、見てきたように新羅の眞興王巡狩碑は、廣開土王陵王碑や、日本の刀劍銘のように中國と離れたところで自らの天下を構築し、自國をその天下の中心に据えている。

## 第五章 おわりに

25) 板山明『秦の始皇帝』多元世界の統一者（白帝社、1999年）、p.159。

26) 「朝鮮常識」疆土篇『六堂崔南善全集』3（玄岩社、1948年）、p.198。

27) 「咸鏡道 利城縣」『東國輿地勝覽』49（朝鮮史學會、1930年）。

以上、對外的な場で用いられる政治技術としての文字とは異なる、國家内部で機能する文字について検討してきた。高句麗、新羅、日本は、古代國家として成長するとともに王の權威のもとで國家を秩序付けることが要され、文字を通じて國家を組織するという方法を中國からまなび、それを國內に轉用することになる。その方法は、古代朝鮮においては碑の建立、日本においては刀劍の下賜とのように、それぞれ異なっているが、王の權威のもとに社會を組織することを目指している点で共通する。古代朝鮮は眞興王の巡狩碑が始皇帝のそれをモデルとしているように、碑を通じて王の權威を誇示することを中國から學び、日本は過去「五尺刀二口」を魏から授かっているように、刀劍の下賜を通じて、王の權威を示すことを方法として模倣している。それぞれ媒体は異なるが、それらの文字は政治技術としての文字とは異なり、國內を秩序づけ、そこで意味を持つものとなっているのである。

### 【参考文献】

- ・ 稻葉一郎 (1989年) 「秦始皇の巡狩刻石」『書論』25、p.81。
- ・ 井上秀雄 (1974年) 『東アジア民族史』、平凡社、p.197。
- ・ 西嶋定生 (1974年) 『中國の歴史』2 秦漢帝國、講談社、p.38。
- ・ 西嶋定生 (1994年) 『日本歴史の國際環境』、東京大學出版社、p.72。
- ・ 榎本杜人 (1971年) 「七支刀銘文再考」『論日本文化の起源』2、平凡社。
- ・ 平川南 (1988年) 「銘文の解讀と意義」『王賜』銘鐵劍概報』、吉川弘文館、p.21
- ・ 福山敏男 (1983年) 「隅田八幡神社藏鏡の銘文」『中國建築と金石文の研究』、中央公論美術出版。
- ・ 粂山明 (1999年) 『秦の始皇帝』多元世界の統一者、白帝社、p.159。
- ・ 李成市 (1994年) 「表象としての廣開土王碑文」『思想』842、p.46。
- ・ 崔南善 (1948年) 『六堂崔南善全集』3、玄岩社、p.198。
- ・ 金思燁 (1988年) 『古代朝鮮語と日本語』、六興出版社、p.49。
- ・ 金亨奎 (1983年) 『増補國語史研究』、一潮閣、p.367。
- ・ 除炳國 (1982年) 『大學國語學史』、學文社、pp.46-47。
- ・ 李基文 (1984年) 『國語史概論』、塔出版社、pp.43-44。

## 要 旨

古代、同漢字文化圏に属していた日本と韓国における文字の始まりは、中國が秩序付けた東アジア世界へ参加するための政治的な要請によるものであった。このような「外部の文字」が古代日本と韓国の國家内部で意味を持ち機能し始めるのはいつからなのか。日本の場合、それは5世紀以前の文字とは性質を異にする「刀劍銘」から推測することができる。稻荷台一号墳出土鐵劍銘の「王賜」、稻荷山鐵劍銘と江田船山鐵刀銘の「治天下」「大王」は、日本が中國を中心とした世界から離れたところで、自らを中心とした世界を構築していることを表わす。しかし、これら銘文は『魏志倭人伝』で卑弥呼の使いに贈り物として渡されている「五尺刀二口」から推定されるように、日本内部で獨創的に考案されたものではなく、中國のそれを方法として模倣したものである。韓国の場合、國內で意味を持つ最古の文字資料は高句麗の「廣開土王陵碑文」である。この碑文は高句麗が中國の中華思想を取り入れ、高句麗を天下の中心國に位置づけ、中國の天下から離れたところで獨自の天下を構築していることを示している。それは新羅の「眞興王巡狩碑」に關してもいえることで、巡狩碑には「朕」や「帝王建号」などの語が見える。この「朕」は中國始皇帝にその起源を持つ文字であるが、その始皇帝も巡狩碑を立てており、それら碑文は共通して、みな山に立てられている。始皇帝が巡幸した山は、泰山は無論のこと、その多くが古くから近隣の國々によって神聖視されてきた山である。同じことが眞興王巡狩碑においても言え、北漢山碑が立てられた北漢山は、はやくから漢水流域にある標幟的な山岳として、大と天の義を合わせ持った神聖な山として崇拜され、磨雲嶺は胡をふせぐ役割をなし、黃草嶺は新羅が沃沮から篡奪した嶺である。このように、これらの山は他國との境界をなし、國を保護する役割をなしていたため、神聖な山として地域の住民に崇められていた。また、始皇帝の碑がみな國の辺境に立てられているように、眞興王の巡狩碑もみな國土の辺境にある。そして、碑文には「蒙天恩」「四方託境」とあり、新羅が自らを世界の中心に据えていることがわかる。このように日本、高句麗、新羅は國の成長とともに、自らを中國中心の天下から離れた所に位置づけようとし、その方法として中國の世界觀を國內へ轉用した。そこに文字の内部化が生じることとなる。

キーワード：漢字文化圏 文字の内部化 刀劍銘 小中華思想 世界觀の轉用 巡狩

투 고 : 2004. 2. 28
1차 심사 : 2004. 3. 13
2차 심사 : 2004. 4. 3

住 所 : (301-775) 대전 중구 태평동 삼부 아파트 32-122  
電 話 : 042-537-5408  
E-mail : shirijung@hanmail.net

K C I

к с і